

東アジア三国の現代における実学概念について

—総合討論から五ヶ月が過ぎて—

小川晴久

二日目最後の総合討論は、東アジア三国の現代の高校の歴史教科書に、17-19世紀の自国の思想がどういう概念でとらえられ、解説されているか、その報告を受け、その上で今後東アジアのこの時期(近世)の思想を、共通に実心実学思想と呼ぶ可能性について討論せんとした。

〈三国の教科書記述〉

中国では「反封建の色彩を帯びる初期民主啓蒙思想」(人民教育出版社版)と規定されていた。この規定は侯外廬主篇『中国思想通史』全五巻六冊における侯外廬の規定にほぼ依拠するものであり、私が学生時代以来親しんできたなつかしい規定である。17・8世紀のヨーロッパは、フランス革命を準備した啓蒙主義の時代であり、長い中世のカトリックの思想の支配から、人間を解放するエンライトメント(啓蒙)の思想ととらえることは著明であり、説得力がある。中国が同じ時期の自国の思想に対し、依然としてこの規定を捨ててないことは健全であるとすら言える。

しかし今回は意外感の方が強かった。なぜかと言えば、1992年に中国に国家的規模の中国実学研究会が誕生し、今日まで14年が経過しており、その主流派は明清期を実学と規定するのみならず、宋代以降を実学思潮の時代ととらえ、立派な著書を出しているからである。東アジア三国で隔年に開催する実学シンポジウムも中国はすでに三回果している。その実績が教科書に反映されていないのは、むしろ意外であった。

韓国では17-19世紀の思想は「実学」と教科書(国定)にしっかり記載されている。そもそもこの時期の思想を実学と規定したのは東アジア三国では朝鮮が最初であり、1920~30年代に遡る。80年近い歴史があり、分断後も南北は国をあげて実学研究に勤(いそ)しんできた。北朝鮮では1967年に主体(チェチェ)思想が登場し、支配思想になって以後、実学研究は弱まっていく。実学思想を金日成思想より高く評価することが許されなくなったからである。それ以後17-19世紀の実学思想研究は韓国の独壇場である。

それを反映して韓国の教科書は実学規定一色である。今回会場をどよめかしたのは、なんと小学校六年生の社会の教科書にまで登場していると聴いたときであった。本報告書の巻末に収めた資料(9頁)を見ていただきたい。骨子は全て小学六年生を相手に語られている。

韓国の教科書では17-19世紀の自国の思想を実学と規定していることはわかったが、次にわかったことは、その実学の性格が近代以降の今日生きている実学概念であることであった。

「民が豊かに生き、国が強くなる方法を研究した学問」

「民の実際生活に役に立つ実用的な学問」(小学校『社会』より)

この実学概念は現代の実学概念である。明治に福沢諭吉が提唱した実学のそれである。近代以降人類はこの実学を実践し、生活を豊かにしてきた。しかし、ここに来て、この実学は、それを発揮する生活様式は、地球の生態系を破壊することが明らかとなった。それゆえに現代(近代以降)の実学概念を改革する必要が生じ、東アジアの近代以前の実心を重んずる実学概念の研究を私たちは開始したのである。韓国の教科書で近世の思想が実学ととらえられていても、それが実心実学ではなく、地球の生態系を死に追いやる近代以降の実学概念であることは、早急に改善されねばならない。近世の学問を実学ととらえた先覚者韓国の、その実学理解が今克服しなければならないそれであるという矛盾を、私たちはこの総合討論の場で確認したのである。

日本の教科書では江戸期の思想をトータルに実学思想ととらえる志向は全く見られない。儒教、その中で朱子学、古学、陽明学、新しく台頭した国学、蘭学というとらえかた、内容の分類としては、社会批判思想の登場や庶民文化の興隆という視点が私たちには親しい。勿論近代的実業の学の系譜上の科学や技術の学の視点はある。ただ中国や韓国と比べて、江戸期の学問のとらえ方は、柳宗悦が日本人は色彩美を好むと規定したように、多様さをそのままとらえる叙述である(柳は中国の美を形、朝鮮の美を線、日本の美を色に見た。「朝鮮の美術」『朝鮮とその芸術』所収)。

〈東アジア三国の現代における実学概念〉

以上のことがわかった上で、総合討論で私たちが確認したことは次の三点であった。

第一点は、現在の韓国で実学と言え、17-19世紀の学問を意味するという韓国実学研究会会長宋載邵氏の指摘である。司会をしていた私は、この発言が飲み込めなかった。そんな筈はない。韓国でも、

中国でも福沢の言う実学（実用の学）が日本同様定着していると私は信じて疑わなかった。シンポから四ヶ月が過ぎようとしていた先月（二月）、後述するが、現代の中国に今日我々が使う実学（福沢の実学）という言葉が日常的に生きていないという事実を知って愕然とした。宋会長の発言が、今にして漸くわかるようになった。韓国の場合は、実学と言えば17-19世紀の学問である実学であっても、その実学が今日の実学概念と同じであれば、不都合はないのである。現代韓国では、今日実学と言えば、第一に17-19世紀の実学を意味し、第二に今日の実用の学、応用の学を意味すると整理することができる。

第二の確認は中国では実学とはあくまで11世紀の宋学から始まり、19世紀に歴史的使命を終える歴史的概念であるという中国側代表団の指摘であった。三つの流派から成ると言う。実気実学、実理実学、陽明心学としての実心実学であるという。今回のシンポジウムの実心実学と言うものを、中国側は陽明心学が切り開いたものとして、とくに17世紀に集中した。葛栄普会長の基調講演を参照されよ。実気実学とは気の哲学を背景にもつ実学、実理実学は理を強調する朱子学的実学を指すものと解される。副会長の張踐氏が代表して中国における実学を三段階に整理した。孔子以来実学だと言った日本側（とくに私）の基調講演を踏まえてであろう。

第一段階は孔子や孟子以来の「真実を求める精神」、第二段階は北宋以後（11世紀～）19世紀までの三つの流派の実学（前出）、第三段階は今日の実学で、これは広い意味での文化的精神である（「実学文化」と）。

第三の今日の実学、文化概念としての実学は、葛栄普著『中国実学文化導論』（2003年）を今繙くと、①実事求是の崇実精神、②興利除弊の経世精神、③以民為貴の民本精神、④真理を追究する科学精神、⑤世界に目を開く開放精神の五つから成ると言うが、不勉強で、このとき承知していなかった。

すっかりしないまま、四ヶ月が過ぎた。しかし先月（二月）現代中国語辞典で「実学」という言葉を引いてみて驚いた。岩波の中国語辞典（倉石武四郎著、1963年）には実学という言葉が載っていない。慌てて『現代漢語詞典』（試用本、商務印書館、1973年、北京）を引くと、「たしかで根底のある学問」として載っていた。私たちが使う実用、応用の学としての実学ではないのだ。逆に「実心」という言葉はよく使われているようであった。中身がある、実直であるという意味で。

ここで気づいたことは、福沢的な、今日の日本ではありふれた実用の学的な実学概念は現代中国には存在しない、より慎重に言えば生きていないという事実である。実学という言葉は日常的に生きていない。存在するとすれば近代以前の儒学や朱子学の代名詞としての歴史的な実学概念だけだという事実である。だから前記葛氏の本を繙いても、11世紀から19世紀までの歴史的な実学概念がほとんど全てで、近代以降の現代実学概念の分析がない。先の五つの現代実学を構成する精神も、過去の実学から抽出したような形になっている。今日の日本に掃いて捨てるほどある通俗的で卑俗な実学概念は、葛氏の本の中にはどこにも見当たらない。

中国側代表団の回答で確認できたのは、中国における実学概念は11世紀から19世紀まで生きていた過去の歴史的概念としての実学であるという事実である（この第二の確認点は今にして明確になった）。

総合討論での第三の確認点は、韓国の発表者のお一人、李光虎氏が、韓国の教科書で披露されている実学概念は俗物的な表現で、17-19世紀の実学者の苦悶が描かれていない、西洋科学に接して得た葛藤、その中で生まれた儒学的真理観が、17-19世紀の実学の基盤であると発言されたことである。韓国の学者が、韓国の教科書に定着している実学観に強い違和感を覚え、今回のシンポジウムの実心実学という概念に強い共鳴を示された事実を、韓国の名誉のために確認しておこう。氏は17-19世紀の実学者たちの苦しみは実心の中に含めることができると述べられた。

総合討論で確認できたことは以上の三点である。そしてそれから五ヶ月たった今、実用の学的な実学、精神を欠いたテクニックとしての実学、誰もが恩恵に浴しているながら、理論ではなくその応用であるという理由から一段低いものとして馬鹿にしている実学（実業学校を大学よりも低い各種学校とみる見方）概念は東アジア三国の中では日本独特のものであって、東アジア三国に共通するものと今まで信じて疑わなかったのは誤りであったことがはっきりした。勿論この実学概念は近代の工業化社会が生み出したものであって、韓国や中国が工業化社会の一員である限り、共有する。しかし、右の実学概念は日本社会が強烈に持っている。この実学概念が福沢論吉の実学の提唱によるものであることは夙（つと）に承知していたが、その提唱が明治の初期ではなく、開国から40年もたつ、明治26年であったことを、同じ年に発表された福沢の『実業論』を今回始めて読んで、知るに至った。開国40年たつても「学者士君子」が商工業の世界に進まないことを福沢は慨嘆していた。福沢の『実業論』を読み、東アジア三国における福沢の実学概念の定着度の差を踏まえ、現代の実学の克服、実心実学概念の探求に向う必要がある。シンポジウムから五ヶ月たった時点での実心実学シンポジウムの報告である。